

# 自由民権家澤本楠弥と北海道植民会社「北光社」の経営

清水 昭 典

- 一 出自と自由民権家としての活動
- 二 北光社の結成
- 三 北光社の経営と地域づくり

## 一 出自と自由民権家としての活動

澤本楠弥は、北海道北見の地にはじめて開拓事業に着手した高知の北光社移民結社の創設に深くかわり、その副社長・社長として同社の経営と国鉄網走線（後の池田線、現銀河鉄道ふるさと線）の敷設など地域の経済基盤の造成などに心身を尽し、五十歳を一期に倒れ、亡くなった北見開拓の功労者である。

ただ本稿では、北見開拓の顕彰碑的人物として澤本を取り上げようとするものではない。

澤本の属した土佐立志社の政治運動が、人民の自覚と自治をうながす世論を起こし、藩閥政治に代る議会政治を開くことにあつたが、それには、生活の基盤のない士族的民権ではなく、「基賤尊卑の別なく一定の権利を享受し、生命を保ち職業を勉める」<sup>(1)</sup>「企業的経済活動にもとづかなければならないとした主張を持つていることに注目、澤本の生涯の活動を、この道をたどり、ひいては、市民的な経済活動による自由で平等な豊かな社会をつくり、この上に立つ国民国家形成にむかった軌跡としてとり上げようとするものである。

澤本は、<sup>(2)</sup>安政二年（一八五五）十二月十五日、土佐の国長岡郡介良郷に生まれた。この介良郷には沢山の古墳があり、平安時代から介良郷となえられ、農業が営まれていた。

江戸幕藩体制下、山内家の支配する土佐藩領に属しきかに稲作が行われたが、塩田もあり製塩が行われていた。

しかし、澤本が生まれた安政二年は、ペリーが黒船を率いてわが国に開国を求め、その結果、日米和親条約を締結した翌年であり、土佐藩の中で、攘夷か開国かをめぐって大きな政治的動揺が起こっていたときであった。

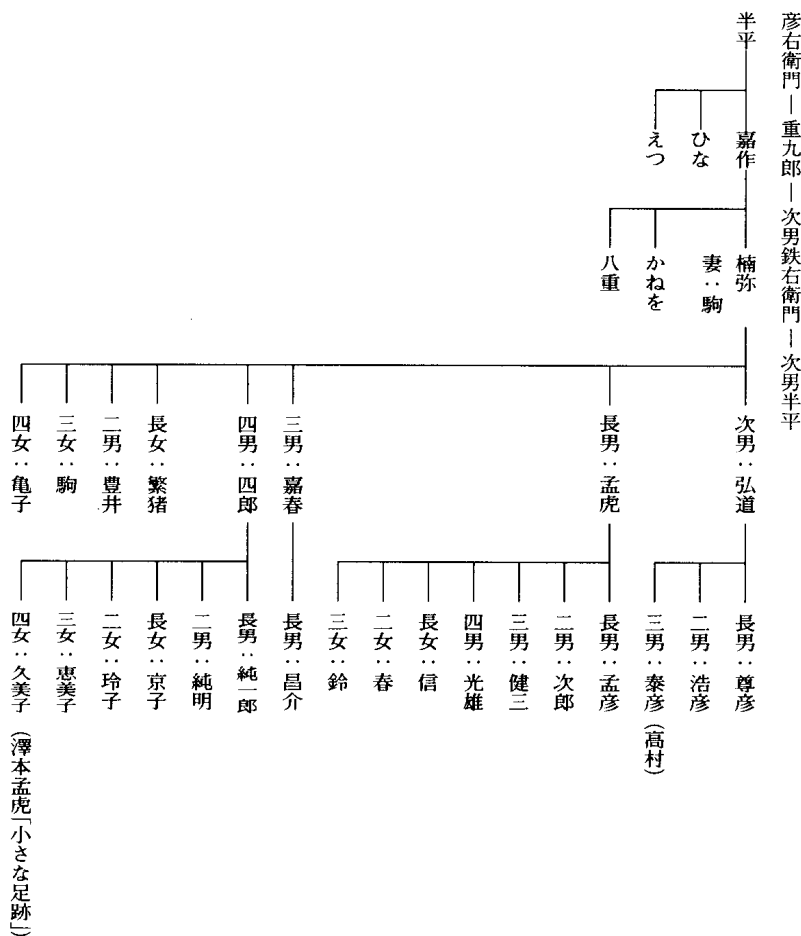
その意味で、澤本は、大きく揺れ動く時代の子であつたが、その出自は士族であり伝統ある上層農家であつた。

澤本家は、昭和十四年に、東京帝国大学教授の著名な社会学者戸田貞三が、日本の家族制度について講義を行ったとき「これが模範的な家系図だ」と学生に紹介したほどの由緒あるものであった。

澤本家の祖は彦右衛門といい、長岡郡大津の城主天竺孫四郎に仕えていたと伝えられている。ところが、天竺氏が長曾我部国親に滅亡させられたあと、その長曾我部氏も亡され、このあと土佐藩主となった山内氏の四代の山内豊信に仕えるにいたったと伝えられている。

ところが元禄八（一六九五）年、澤本家は家屋敷を売却、介良村の辻の内に転住、水田を買い求めていた。このことは、澤本家が武士から土地保有の農民に転じたことを意味しよう。

彦右衛門の長男を重九郎といい、重九郎の長男を重次兵衛といったが、重次兵衛が宗家を継いだ。そして重次兵衛の次弟、三弟がそれぞれ分家独立するが、それが枝葉栄えて一族十一家を形成した。澤本楠弥の直接の家系は、楠弥の長男孟虎の自伝「小さな足跡」によると、（本稿では孟虎の孫の澤本正樹の復刻版によった）次のように示されている。



楠弥は嘉作の二人の娘のあとに長男として生まれたが、その後もただ一人息子として両親から慈しまれて育ち、成人前に一歳年下の従姉妹の駒を妻に迎え、十九歳のとき長男孟虎をもうけた。

そのころ楠弥は、六、七ヘクタールの田地を所有する地主となっていた。当時の府県下では、農家は零細な田地を保有し、一戸〇・五ヘクタールほどの田地があれば、自作あるいは小作農家としての経営が行われていた状態であったから、楠弥のばあいは相当数の小作に耕作を委託する上層農家ないし豪農であったとみられる。

豪農とは、江戸時代以来成立し、わが国の近代化を担った上層農家の中でも、経済的に、幕藩体制下に成立した村方地主が、地方産業の勃興下、商品生産者として発展したものをいうが、幕末の畿内商品生産地帯のいわゆる富農や、水田単作地帯のいわゆる寄生地主をも含めているものである。

澤本家が厳密な意味で富農であると規定できるか否かは、同家が商品生産者としての経営を行っていたか、あるいはどれほど寄生地主化していたか精密な調査検討を必要としようが、これに関する史料が得られなかったので、澤本家が水田を所有する寄生地主的存在であったということに言及することにとどめる。

また、富農の果たした政治的役割として、明治初年から政府が有力な豪農たちを軸にして地方行政の体制を作ろうとしたため、有力豪農が政府に結びついたといわれている。

これに対し、生産者的性格を保ちつづけた中小豪農は、農民たちと結んで生産と生活の擁護と発展のために運動することとなったとし、この運動が地租改正等に対する反対運動から自由民権運動に連動していったといわれている。

この点では、楠弥が当主であった澤本家は、有力豪農であったが、中小豪農であったかの階級的規定は措き、明

治初年に政府の地方行政の担い手とされ、後に自由民権運動の活動家を生み出していったことを楠弥の次の履歴から明らかにしていきたい。

楠弥は二十歳ころから、介良村用掛、高須村用掛に推され、その後、区会議員、村会議員に選挙され、高知県地租改正御用掛、地主総代に選ばれ、明治政府の地方行政の末端にあつて職務を果たすようになる。これらの公職への就任の時期は明らかではないが、地租改正事業の始まった明治初年から、明治十三年に定められた区町村会法による区・村会議員となった明治十年代の前半期の時期であろう。

明治十四年、楠弥が二十六歳のとき、北海道開拓使官有物払下げ事件が起こり、自由民権運動家の全国的な払下げ反対運動の前に、藩閥政府が倒壊の危機に瀕した。

このとき、伊藤博文らが、十年以内に憲法を定め、国会を開くことを詔勅によって約束することによって、政府てん覆の危機を切り抜けたが、土佐立志社の民権運動家たちは、来るべき国会開設にそなえ、政党政治を必須として、板垣退助を総理とする自由党を結成した。

このとき楠弥も自由党に投じ、各郡の有志たちと呼応し、あい提携して盛んな政治運動を展開したが、長岡郡下では、後に北海道浦臼にキリスト教の聖園農場を開いた武市安哉とともに自由党の二大頭目として重んじられた。そこで楠弥は、十四年十一月、十五年八月、十九年九月といわゆる三新法期の府県会規則による県会議員に三選された。

この三選の期間に、高知県から徳島県を経て香川県に通ずる四国新道開発案が田辺良顕知事から高知県会に提案されたため、県会がこれに猛然たる反対運動を展開した。

田辺知事は第二の三島通庸といわれたほどの人物であった。

三島通庸は、よく知られているように、明治絶対主義国家の典型的な藩閥官僚で、政府内部でも最も自由民権運動を憎悪し、明治十五年福島県令に在任中、会津地方から米沢および新潟方面に通ずる道路の開削を計画し、南北会津郡下の住民に夫役または夫役金を課したのであった。そのためにこれに反対する住民や自由党員が多数を占める福島県会と激しく対立、自由党員を逮捕して道路開削を強行した人物であった。

田辺知事も三島が福島県で行った自由民権運動の弾圧を高知県で強行したもので、住民の費用をもって道路を開削し、これに反対する自由民権運動を弾圧するというのは、単に三島や田中の政治姿勢だったばかりでなく、上から近代化・産業化を強行しようとする明治政府の姿勢だったのである。

当時、自由党に属した県会議員である島田紘、西村昌義、西山志澄、細川義昌、吉良順吉、坂本南海男（後の直寛）、武市安哉ら（後に北光社の結成にも澤本と坂本が加わる）は、県会において、熱弁を振るってこの暴圧的な提案と闘った

彼らの中でも数理に明るい楠弥は、県会において住民の経済生活や物価に関する細かな数字をあげ、政府提案を廃案とすべく知事に対し論戦を挑んだが、その大要は次の四点に要約される。

第一にその年の農作物が凶作であり、飢餓の迫る住民に新たな課税を行うのは時機に適せぬこと。

第二に地方経済の発展に則せぬこと。

第三にこの工事が莫大な費用を投じたとしても、道路開削後の利益があがらず、収支があい償わぬこと。

第四に、このような大土木工事は本来地方税で行うべきものでないこと。

これに加え、楠弥は、福島事件の例をあげ、地方税をもって大土木工事を起こすことが、どれ程住民を経済的に窮迫させることになるか、熱誠をこめて、知事の提案に反論を展開した。

当時、楠弥は、郡下で郵便報知新聞を購読する数少ない知識人であり、手もとには、ルソーの「民約論」、ミルの「自由論」の翻訳書があり、君主主権論に対する人民主権論を唱えたルソーの著作や専制政治に対する国民の政治的自由の確立を説くミルの著作などによって、現在の日本国憲法に成文化されている民主主義と自由主義の政治思想を受け入れ、これを実践していたことがうかがわれる。

明治二十年十月、楠弥は、自由民権運動最後の盛り上がりであったといわれる三代建白運動に加わった。この運動は、政府の屈辱的な外交政策に対する「立て直し」、住民の経済生活と活動を圧迫する重税である地租の「軽減」、民権運動に対する弾圧を停止する「言論集会の自由」を要求するもので、全国から民権運動家がこの三つの要求を掲げた建白書を携えて上京、要路の大官を訪れ、陳情を重ねたものであった。この運動は、燎原の火のように広がった。

楠弥も、武市安哉らとともに郡の総代に選ばれ上京したが、東京での活動を次のように述べている。

「明治二十年十月三大事件長岡郡建白総代に選挙せられ上京し元老院に奉呈し議官に面謁し其事情を上陳す、当時大木（喬任）元老院議長、本田、綿貫、黒田、中村の諸議官、森（有礼）文部大臣、吉井宮内次官、佐々木、山尾、西村寿宮中顧問官の御宅を叩き建白の事実を拝陳す」

楠弥とともに総代として高知県から上京した同士には、片岡健吉をはじめ、山本幸彦、武市安哉、細川義昌、西山志澄、黒岩成存、今村弥太郎、前田岩吉、中内庄三郎、土居勝郎、坂本直寛、楠目馬太郎、山本繁馬、溝渕幸馬、

傍士次の十六人がいた。高知県以外からも星亨や尾崎行雄など近代日本憲政史に大きな足跡を残した人をはじめ六百余名が上京しこの運動に参加した。

高知県の同士たちは、片岡健吉らを代表として首相伊藤博文に面会を申し入れた。ところが十二月二十六日、内相山県有朋が、突如保安条例を定め、即日これを施行し、建白の運動に従う者に対し、皇居から三里以上離れた土地まで退去することを命じた。

ところが高知県の同士は退去を拒み、保安条例違反により刑罰を科せられることになった。このときの様子を楠弥は次のように記録している。

「明治二十年十二月二十六日夜京橋警察署に引致され、保安条例により二年六ヶ月の退出を命ぜられたるものに服せず、故に同夜警察庁に拘引取調を受く。

同二十七日東京輕羅裁判所に於て二回取調を受け同夜保安条例第四条違反により輕禁固二年六月、監視二年の宣告を受け鍛冶橋の獄に入る。翌二十八日石川島監獄に護送され、同監獄に繋がる。」

監獄では食事が充分でなく、また寒気がはなはだしく、獄吏はしばしば同士たちに対し侮辱的な態度をもって臨んだ。後に楠弥の持病となり、これより十年後、彼の生命を奪った肺結核と痔疾に罹患したのもこの獄中であつた。しかし多くの同士とともにキリスト教に入信したのもこの獄中であつた。

楠弥らはここに一年余つながれたが、明治二十一年二月、大日本帝国憲法発布の際の大赦によって出獄した。しかし病が篤く、直ちに神田駿河台の山龍堂病院に入院、同士たちより遅れて帰郷した。

一同が帰郷したとき、長岡郡の住民たちは数百艘の船を仕立てて浦戸港外に歓迎し、また祝宴を張って在獄中の

労をねぎらったという。

ところで、三大事件建白のうちに、地租の軽減という要求が掲げられていたが、この要求はかねてからの立志社の主張でありほかの二つの要求よりもとりわけ身近で切実な課題であった。

楠弥も次のことを記録している。

「明治十六年十二月関田可通（後の貴族院議員）、溝渕静閑、小藤武之、土居光〇の諸氏と共に長岡郡人民総代に選挙せられ地租軽減の議を政府に請義す。

明治二十年二月長岡郡有志諸氏と農民会を組織す。

同年六月島内武重（後の貴族院議員）外数氏と共に高知に農益商会を設立す。」

この地租軽減要求は、単なる減税要求だったのではなく、楠弥の属する立志社の民権運動根底にある経済思想と深いつながりのあるものであった。

立志社では、明治九年、社の設立の趣意書に「夫れ我輩齊しく、日本帝国の人民たり。則ち三千余万の自民尽く同等にして、貴賤尊卑の別なく、当さに其一定の権利を教授し、以て生命を保ち、自主を保ち、職業を勉め、福祚を長じ、不羈独立の自民たる可きこと昭々乎として明白なり」と人民の自由な経済活動と平等な社会的地位を主張した。そして「立志社創立条例<sup>③</sup>は、即ち（中略）官山払下を為し士族終業の道を開奥せんとするより起因して設立する所なれば其條款たる尽く、営業会社の性質に非ざるは莫し」という。自由で独立な市民が会社企業を起こし、経済活動を振起させ、地域に産業を起こすという目標を掲げていたのである。

そこで藩閥専制政府のとつた地租をはじめ新規の課税を行い、これによる軍事的な大国への道とは異なった、市民

的な経済活動による自由で平等な近代国家をつくりあげる道を求めていたのであった。それゆえに住民の経済活動を通じて蓄積された富は、住民自らの手で再投資されるとともに勧業や土木、衛生、学校など公共のことに使われるべきことを主張していたのであった。

このような活動をおし進めるために、楠弥は病気の身体を冒して、介良村村会議員、介良村名誉村長（無給の名誉職としての村長）、長岡郡二字等小学校管理者、山田堰組合会議員、県勧業諮問委員、同部会議長、各警備郡参事会員、郡蚕糸組合長、郡村長会議長、高知県会から選挙されて土木事業を起こす県常設委員など、多くの公職に就いたが、これらの活動は、後の県下の甫喜峯疎水工事や北海道開拓事業にみられるように、地域づくりを行い、地域に企業を起こし、地域に豊かな社会を創ろうとする道につながるものであった。

明治二十八年八月、楠弥は、長岡郡新改村北方の山岳、甫喜峯の疎水普通水利組合委員長に選任された。甫喜峯山麓の農家は江戸時代から水不足に苦しみ、そのためしばしば水争いで流血の惨事をひき起こしていた。これを解決するには、甫喜峯にトンネルを掘削し、穴内川の水を引くことしかないということで、有名な野中兼山が十七世紀にこの工事に着手したが成功せずに終わったものであった。

明治二十五、六年ころにいたって、この掘削が住民の間に再び話題となったとき、当時の郡長呉服絹がこのような大事業を遂行するには、必ずや名望と勢力のある人物がいなくてはならないと説き、この意見を受け入れた村総代たちが楠弥と中沢楠弥太を推したのであった。

これを受けた楠弥は、家業をなげうって、高知市内の旅館を居所と定め、昼夜県会などに陳情を重ね、二万余円の県費補助を受けることができた。

その後、楠弥は琵琶湖疎水、伊予別子銅山などを視察したり、高知市の実業家の協力を得たり、時の板垣退助の協力を得て、地質調査、設計、工事の費用を調達することができ、工事に着工、この事業の成功の目途を立てることができた。

### 北光社の結成

こうして楠弥は、農民のために公共事業を起こし奔走してきたが、明治二十八、九年、県下農民の疲弊がきわまったのを救済するためと北海道で拓殖事業をすすめる、この地に「潔き義に生きる神の国」をつくろうとする立志社のクリスチャンたちとともに北光社と名づけた移民団体の設立を志すにいたった。

この結社の設立は楠弥が主導したが、片岡健吉、西原清東（のち代議士となりアメリカ合衆国のテキサス州に日本農村を開拓した）、坂本直寛（坂本龍馬の甥、土陽新聞主筆、初代北光社社長、のちに牧師となり、北海道に定住、札幌で死去）、由比直枝、大脇順若（二人共地元銀行の頭取）ら七、八人の同士と語り合い、組織をつくったものであった。

ここで組織の推進役、実行者選ばれた楠弥は、移住地の選択に入ったが、先ず同士林有造の斡旋で、有造の実兄岩村通俊北海道庁長官の了解を得、一旦天塩の地に一千万坪の貸与予約をしたが、その後の岩村の転任と予約地が御料地に編入されたため破約となり、新たに北見地方の土地を選定することとなった。<sup>(4)</sup>

当時、北見地方では、明治二十四年、網走―旭川間中央道路が開削され、湧別、下常呂、上常呂の三大原野の区画測量が行われ、土地開放が進みはじめていた。このうち湧別と野付牛は屯田兵の入植が決定し、二十九年に兵屋

の建築がはじまっていた。

北光社の初代の社長に選ばれたのは、結社の思想的な指導者、坂本直寛<sup>(5)</sup>であるが、実際に多くの出資者を集め、現地の事前調査を行い、北光社の規約をつくり、移民船高洋丸に座乗し、移民一二戸、約五〇〇人を率い、入植地クンネップ原野に入植させ、苦心の経営にあたったのは当時副社長であった楠弥であった。

明治二十九年八月、楠弥と同士武内羊之助とともに北見入りをし、北光社本部の位置を定め、事務所、倉庫、厩舎などを建築、また三十年に入植する移民の仮泊所となる草小屋一棟を建築、十二月に帰郷した。

その後、楠弥は大いに同士を勧誘し、十二名の社員を得、資本金を九万円とし、三千五百六十町歩（実際に入手したのは一千六百町歩余）の土地を入手する手続きを進めた。

さらに、北光社規約、北光社移民規則、定雇人規則、旅費支給規程、処務規程等の草案を作成し、創業費の予算編成を行った。

明治三十年一月二十六日、楠弥は高知市において北光社の設立総会を開き、明治三十年度から十年間の予算編成、農場経営の方針を明らかにし、規約などを決定した。

この規約の主な内容は次の通りであった。

#### 北光社規約

第一条 本社ハ北海道北見国常呂郡字クンネップ原野ニ於テ開墾地ノ貸下ヲ受ケシ者ノ合同団体ニシテ拓殖事業ヲ営ムヲ以テ目的トス。但シ未ダ貸下ヲ受クルニ至ラサルモノト雖モ、現ニ本事業ノ創立ニ加ハリタル者ハ将来貸下ヲ受クルト否トニ関セス本社員タルノ権義ヲ有ス

第二条 本社ハ北光社ト称シ、本部ヲクンネツプ開墾地ニ設置ス。将来他ノ原野貸下ヲ受クルトキハ支部ヲ設置スルコトアルヘシ。

第三条 本社ハ資本九万円トシ：以下中略：

第十三条 本社ノ営業年限ハ起業後十ヶ年間ト定メ末年ニ至リテ本社所得ノ耕宅地林地薪炭用地其他ノ資産一切ヲ計算シ各社員ノ出資ニ対シテ分配シ、又営業末年ニ至ラスト雖モ毎年度ノ収支決算残金ハ翌年度ノ経費予算ニ差支ヘサル限りハ各社員ヘ配当スルモノトス。

第十四条 本社ニ於テ移住民、役員、各社員間ニ成墾地及ヒ薪炭用地ノ所有權ヲ分割処分ヲナスニハ凡テ公平ヲ旨トシ、土質ノ良否其他一切土地ノ便否得失ヲ参酌シテ配分区画ヲ作り各受得者ト協議ノ上処分ス。若シ協議困難ナル場合ハ籤ヲ以テ決定ス。

以上の規約の内容のうち、特に注目されるのは、北光社では成墾後の土地を出資社員らに分割配分するばかりでなく、移住民にも分割配分し、かれらに所有權を与えたとしたことである。

この点は、北光社規約と同じく総会において定められた。「移住民規則」の第三条に次のように詳しく定められている。

#### 移住民規則

第三条 本社ハ移住民ニ対シ開墾費ヲ給セス。全地域成墾ノ上ハ起業後九年目ニ亘リ独立移住者（移住資金を持ち渡航費・生活費を自弁できる者）ハ其開墾地三分ノ二、補助移住者（社から各種の貸与金の給付を受ける者）ハ同条三分ノ一（後に十分ノ四に改める）ノ所有權ヲ分与シ、尚其十分ノ一二該当スル薪炭用地ヲ付与ス。

この頃、北海道における大農場経営は、農業労働者を雇用する直営の形態をとるか、地主に雇われた現地の農場管理人の管理下に小作制の形態をとるのが専らであった。

北光社でも、経営の始めは、社の管理下に小作制の形態をとったが、小作人に将来土地の所有権を与えて自作農とするという方針を成文で掲げたのは当時の北海道では稀有のことであつたと思われる。

按ずるにこの規則には、土佐の立志社結成の趣意書に盛られた「三千有万の自民尽く同等にして、貴賤尊卑の別なく、当さに其一定の権利を享受し、以て生命を保ち、自主を保ち、職業を勉め、福祚を長じ、不羈独立の自民たる可きこと昭々乎として明白なり」という自由で平等な人格による経営活動を定めた主張にもとづくことが明らかである。

当時の北海道では、「小作人は牛馬のようにただただ使役して疲れさせるべきである」とか「小作人に金を与えると逃亡してしまう」とかいわれ、しばしば小作人は多分に強制的労働による搾取の対象として捉えられていた。

このような人権抑圧の下では、理想社会どころか開拓の成果も挙げぬことを、奴隷労働による開拓で成果のあがらなかった南アメリカのプランテーションを例証し、これに対比して「新大陸に渡った英国のピューリタンに類似するもの」を標榜したのが、楠弥の同志であり北光社団体の精神的指導者であつた坂本直寛である。

坂本は、明治二十九年八月十一日、新渡戸稲造らが主催する札幌の北海禁酒倶楽部の夏期講習会で「北海道の発達<sup>6</sup>」と題し講演しているが、小作制が地元のみを利するばかりで自治独立の企業心を振起せぬことを次のように語っているが、この主張はまさに北光社の唱えるところであつた。

「植民地に於ては社会の制裁薄弱なれば是景況人民の風俗に顕象す。我が北海道沿岸の村落を見来たれば慨嘆

に堪えざる者多し。人は品格を要す。品格は自治の精神より来る。自治の精神なくんば村落の品格は発達に伴う是れなければ立派なる植民地と云い能わざるなり。客言するに人は正直ならざる可らず、真面目ならざる可らず。植民地にして所謂小作主義を取り地主のみ多く取で小作の利不利を顧みざるが如くしては自治の精神を人心に吹き込む事を得る能わず。勿論困難なるも将来のよき発達進歩を思えば之を忍んで此の悪弊を取り去らざる可らず。小作人とするよりも小地主として少とも小土地を与え自治独立の人とせざる可らず。又教育もせざる可らず」移住民規則には、キリスト教的な生活態度を規範とする、次の条々も定められた。

第九条 移住民ハ土地ノ開墾及耕作ヲ怠ラザル限リハ養蚕、牧畜其他一切ノ諸工業ヲ営ムハ各自ノ自由ナリト雖モ酒店、料理店等本社農場ノ風儀ヲ害スル業務ハ一切禁止ス。

第十一条 本社農場ニ於テハ姦淫、飲酒並ニ賭博類似ノ遊技ヲ禁ス。若シ犯スコト数度ニ及ヒ改悛ノ見込ナシト認ムル時ハ其開墾ノ程度如何ヲ論セス本社ハ其土地ノ宛付及配当ヲ取消シ、補助移住者ニ在テハ食料居小屋、農具等ヲ返還セシムルコトアルヘシ。

総会に二十一日先立つ一月五日、楠弥は土陽新聞に、「北光社の拓殖地<sup>(7)</sup>」という見出しで、前途への希望溢るるばかりの長文の募集広告を掲載した。

#### 北光社の拓殖地

澤本楠弥

拓殖殖民の声、一たび天の一方を破つてより天下翕然として是に傾注し、我國民は新天地を洋の東西に求め、縦横の画策至らざるなしと雖も、熟ら思うに今日我國の難局たる政治的經濟的及び社会的問題を解釈する上に於て其最も捷徑とせるものを北海道の拓殖事業なりとす。吾等同志の士茲に感あり、専ら力を斯業に竭し、剛健な

る理想の新村落を北海の天地に造り、自家の希望の如く之を鍛鑄し、之を陶冶し、以て平生報国済民の素志に酬いんことを希び、爾来相謀りて一の団結を組織す。北光社即ち是れ也。

去歲夏七月、余は同志坂本直寛、西原清東と相前後し北海道探検の途に上りてより、爾来半歳の日月を朔漠の地に送り、其間蹄跡幾人ど十州の山河に普ねく、帆影また全道の海岸に及び、かくて広く探検踏査の労を執り、而して後、地勢交通殖産氣候の優勢良否を比較調査し其最も宜しきに協ひたるものを択び終に地を北見国常呂川の upstream に卜して本社農場となせり。

抑も今日北海道に於ける各種の事業の進歩は実に驚く可きものにして、日進月歩の文字も尚其の真を寫すに足らざるものあり、彼の漁鉞商工業の發達、海陸運の拡張、港湾の築造及び鉄道の延長等は元より言うを要せず。殊に移住民の繁殖は直ちに拓殖事業に大進歩を促し、其土地貸下希望者の多き願書雨の如く道庁に集まり、従つて貸下け、最早今日に至りては流石に広漠なる荒野密林も幾んど鋤犁斧鉞の至らざる所なく、従つて地価頗る騰貴し、函館、小樽の如き市街にして高価なるものは一坪四五十円を唱うるものあり。此の勢よりせば今より兩三年を経過せんには寸地尺林をも余さざるに至るべきの状況なるを以て、今日適當なる開墾地を得るは最も至難の業にして出願者の多くは其の目的を達すること能わざるに引換え、本社が幸にも最後の地を得たるものは一に、皇天の冥助厚きに帰せずんばあらず。而して今や本社の事業漸く緒に就かんとするの時に際し、該農場の一斑を世人に紹介するもの決して無益の業にあらず。蓋し該地の状況たる之を詳記詳述せば数千枚の紙数を重ねとも之を尽す能わず、茲に掲ぐるものはたゞ九牛の一毛に過ぎざるなり。

本社農場は北見国常呂川を溯る凡十三里程の上にあり、名付けてクネネップ原野と云う。其貸下けを得し坪

数は五百六十七万坪（一千八百九十町歩）にして、三年間に三百四十戸の移住民を入れて之を開墾せんと欲するものなり。此地従来無人の境にして、只二戸のアイヌ人を除くの外は人跡多く至らず、荒漠たる草野林叢空しく狐狸の蹂躪に委せしと雖も、本年四月よりは隣地に屯田兵村六百戸の新設あると共に百戸以上の市街地を置き既に郵便電信局の建設に着手中なるのみならず、其地実に北見鉄道幹線の布設地に当り、本社農場の地続きに於て追願地四百五十万坪を貸下げ、之れに二百六十戸の移住者を入るゝの計画就るの曉に於ては、此ノ付近に一千二百余戸の人家を得て繁栄なる一大村落たるに至るは元より、汽笛一声此間を貫通するの日又決して遠きにあらざるなり。此の好望を有する本社農場の地勢は、東南北の三面に山嶽を控え中央に高丘を狭みて南北に二分し、ムカ、クネネツプ、常呂の三川流此間を縦流し、原野の東端に於て合して一大河となる。

其幅二十間内外、深さ最浅の所と雖も三尺以上に及び水勢頗る緩にして舟筏の上下に適するを以て本社は既に小蒸気船航通の計画あり、而して土地は樹林地、草原地相半ばし、其土性は多く沖積土に属し、地味は従つて肥沃にして最も農耕に適し、殊に河畔は良樹密生し、各種工業用の材料に供して余りある等、地勢最便を得たるに加うるに該地元來其の東北方の海面に緩潮を受くるが故に氣候最も温暖にして平均春季三十八度余、夏季六十三度、秋季四十九度、冬期二十二度、全年平均四十二度四分余の温度を保ち、其の氣候恰も欧米の大都會たるベルリン、ウインナ、シカゴ、ボストン等と相伯仲し、之れを他の十勝、根室、釧路、天塩等に比し、高度にして又之れを札幌、函館等に比するに大差なきのみならず、雪霜の如き他地方より遅く始まり早く終るの実況なるが故に、従つて雨雪量の如き最も少量にして、現に昨年（昭和十一年）の如き十二月七日迄に只二回の微量なる降雪ありしのみ。而して温度は斯く冬季中に於ては氷点以下を示し、寒冷は則ち寒冷なるに相違なしと雖も、風土自ら生物を化して

之れに適するに至らしめ、彼の寒冷の獸類が其毛皮自然に厚きが如く、其人体に感ずることも従つて甚しからず。余の如き羸弱多病の者と雖も、其滯在中は通俗の被服にて能く其寒冷に甚えしを以て之を知るに足るべし。世人の北海道を難するものただ冬期嚴寒の苦を臆断して暑中清涼の快味にして植物の成育、人畜の健康に恰適する幾んど内地人の夢想し能わざる所なり。此の快味は前きの苦を償つて尚余りありというべし。而して農産物の状況に至りては前記の如く本社農場は、未だ荒漠の原野に属し、作物の敢て挙ぐべきものなしと雖も之れを其近傍駅舎の作物に徴するに、畑作物は地上地下の作物及び蔬菜等一も生産せざるなく、且つ最も豐熟の状を示すものなり。土人の言によれば當農場は尚之よりも優等なる收穫物を得べき見込ありと。而して地勢最も灌漑の便に富むが故に地積の過半は水田となして米作に適すべく、現に昨年網走分監の試作によれば一株も成熟せざるなく頗る良結果を呈せり。

本社亦た本年より之れが試作を為さんとする設計あり。其他大麻、亜麻、菜種、甜菜、馬鈴薯、粟、玉蜀黍、大小豆、裸麦、小麦、蕎麦の如き、或は食用に、或は工業用に供する作物に適用し、多くは一反歩二十円、少なきも六円以上の收穫あり、今北海道庁に於て取調べたる最近五年間全道重要農産物一反歩平均收穫表を掲げんに左の如し。

硬米一石二升二合、糯米九斗二升八合、大麦一斗四升七合、小麦八斗八升九合、裸麦九斗五升七合、蕎麦七斗一升六合、大豆八斗七升、小豆六斗六升三合、玉蜀黍一石六斗四升四合、粟一石九升一合、菜種一斗一升五合、藍口一貫二百八十六匁、大麻十二貫四百三十二匁、馬鈴薯二百四十五貫匁、亜麻七十八貫八百三十二匁、甜菜三百三十九貫二百四匁、

其の他水利最も便にして水車を運転して精米、製粉、精麻、其他の工業を為すに適し、且つ樹林中には鹿、兎、狐、狸等の獸類に富み、其捕獲頗る容易なるが故に一たび銃を肩にして林中に入れば、良獸美尾思うに従うて捕え得べく、又河流には鮭の産卵期節に至れば浜上して此に群集すること実に夥しく其漁獲更に容易にして、或は手にて直ちに捕え得べく、或は杖若しくは棍棒にて打ち得べき等、池中のものを捕うより易く現に今の滞在中僅かに一ヶ月間に千五百尾を漁せり。此他鱒、イダ、アメゴの如きも同じく群泳して朝夕の食糧に供することを得べければ移住民は充分に肉食し得べきなり。斯の如きは全然武陵桃源裡のもの、到底内地に得べからざる別箇の樂園なり。而して此間に樂天的村落を建設し、天を望んで地を開拓し、頂天立地、圧制なく、束縛なく、迷信なく、罪惡なく、馬鹿氣切つたる義理習慣風俗なく、人毎に田園あり、家屋あり、幸福あり、自由あり、人情ある一種の理想的社会を造り出すもの実に人生至上の快事というべし。有為の士、奮つて北光社の旗幟を認めて来り集まらんことを希う。

明治三十年四月四日、楠弥は、移民約百家族五百人を率い、七百二十トンの貨物船高洋丸に座乗、高知市以外の浦戸港を出帆した。幸い海上は、この船出を祝福するかのように、太平洋の波の小さなうねりがあつたものの静かに晴れ渡っていた。楠弥の胸中は、前途へのあふれるばかりの期待と事業への責任の重さの自覚が去来した。

その後、須崎港にこの方面の移民を乗船させ出港、これより関門海峡を通過し、日本海を北上し、小樽に寄港、宗谷岬を廻り網走に向かった。この航海では船中に麻疹患者が発生、二十数名の死者を出し移民の士気を沮喪させ早くも前途の多難さを思わせた。またこの時期はオホーツク海の流水が船の行手を遮り、このため船は三度にわたつて宗谷岬より引返し、利尻島や礼文島に仮泊、四回目によく流水を切り抜け、五月一日、網走港ポンモイに

到着した。三日、網走に上陸、同地に二日休養仮泊、五日、網走を出立、二里程歩いて、網走監獄の紅衣をまとった囚徒が燕麦を播く作業を行っているのを横に見ながら通過、喜多山の第一号駅通、端野の第二号駅通に宿泊、五月七日、北光社本部の宿舎に到着した。

これより移民たちは、各戸ごとに予め用意された草小屋で暮らすことになったが、雑草の生い茂ったなかのみすぼらしい小屋に、これがわが家かと立ちすくみ、女たちは泣き出してしまった。

移民の一人で、これより北見で七十三年間を暮らし、昭和四十五年に九十二歳で世を去った伊東弘祐は、入植時の思い出を次のように記録<sup>⑧</sup>している。

「二間に三間の草小屋、すいて見えるような屋根、及二間に二間の居間に炉を切り座敷の床板は割木を並べた凹凸のがたがたした上に、莚は敷て有るが、一間に二間の土間は熊笹でばさばさして居たが、出入口は莚を釣し、夕飯の仕度をし、カン照を明しに夕食を済し床に就く事にしたが、隣の小屋を見ても唯も来て居らず、枕元に親子共銃と斧を置いて寝床に就いたが、今にも熊でも押破つてはいるのでは有るまいかと思うと、恐れ気がして、録々、寝れず、うつらうつらとして居ると、裏の密林で、ホエルとも泣くとも判らん大声が響き渡る有様で、父があれは何物と聞く、其の時うつらうつらと寝ぶつて居たが目をさまして聞いて見ると仲々少い者ではないらしく、東が白みかかると銃を持て密林の方へ行つて見るが、何物も見えず、行けば行く程向うへ行くので此れは鳥の類と言う事が漸く判り安心したのだ。其の翌日、小屋の内外取片付や掃除をし、順次小屋の周囲を刈払い、伐り片付、野菜畑から開墾を初める様にして、自分は網走に残して置いた荷物を取りに行き、同所で一泊。翌日背負て二号駅まで帰り泊る。宿料三十五銭支払い実に驚いた。

三日目に帰宅。野菜を播き、次は五升芋蒔の開墾を初めたが、全部耕と容易でないから、畦は打起さず、蒔くみぞ丈起して播き、唐黍も植る処を真径一尺五寸位打起して播いたのだ。それも自分の土地は半草原で、其の分に、何分、まていな事をしては幾等も蒔付けが出来ないので右の様な方法を取た。

稲黍は笹を蒔り、焼き払、振り散らして鋤でかじり、蕎麦も木を切り、笹を蒔付け、乾燥した時焼払い、種子を振り播いて鋤で掘りかじり播にした。稲黍五セ、唐黍二反、蕎麦二反、五升薯二反、野菜五セ位播付けた。

種子は、薯、蕎麦は網走監獄から、唐黍、稲黍は石狩方面から北光社で取り廻したのだ。野兎の食残り稲黍一俵、そば四俵位、薯二十五俵、唐黍は降霜の為皆無の有様で、実に悲惨の極み。自分が出稼ぎするより方法なく、オンネメーム屯田兵の錬兵場を設置するので、平地だが花や茅の株を鋤で削る出面賃一日三十銭貰ってやった。又屯田兵官舎の薪切り、一式切って五十銭貰って出稼をした。其も僅かな仕事で、北光社が四区の兵舎はまだ三十一年に兵隊が入植するので、四区の兵屋用の材料伐り出しを移住民救済の為、請負許可を受け、ムカ川の北岸に飯場を建て稼がせる事に成り、雪中じぶんは杣木仕事を申込みに行った。

我が武内分と称するのは、一組合其の戸数は十三軒で、其の氏名は、自分伊東恒吉（改名前）、同亀之進、同今之助、別役銀吾、安岡亀次、森田正寿、嶋村令正、戸田藤吾、同直次、同安太郎、同岩太、其内稼ぎに出ない者は、伊東今之助、戸田藤吾、十一戸は飯場に就き働いたが、仕事に慣れて居らん者が多く、殊に初ての雪の上、初めての零下三十度内外の酷寒、軍手は無いし、衣類は毛物無しで、仕事の能率は揚らず、仕事の仕様は、平人夫としては雪道付け、又木で毛氈を作り、其に材料を積み、先を引き、後を押して運ぶので、仲々単価が僅少の賃金で、飯場料とバランスが取れないのだ。ところが暮の年越に、せめて米の二、三升でも貸して貰いたいと言

うので、数名で談判したが、とても聞て呉れず、家族の多い者は、小豆三升位より貸与しないので、実に哀れな事には、五升薯と玉菜位で、年取りをしたのだ。」

楠弥が掲載した「北光社の拓殖地」の広告文は、遺憾ながらあまりにも楽天的で苛酷で厳しい現実を認識するところから程遠かった。播きつけた作物は野苺に食い荒らされ、移民達は、屯田兵村の土木建設工事、冬山の零下三十度の酷寒の中での伐木の運搬などで僅かな賃金を得て露命をつなぐ有様であった。

### 北光社の経営と地域づくり

入植の次の年明治三十一年、ある程度開墾が進み、主食となる稲黍や蕎麦などの作付けも本格化し、収穫の見通しが立ったことを人びとにほっとした思いにさせた八月下旬のことであった。

二十九日から始まった長雨が、九月六日暴風雨と化し、七日午後十時、常呂川が濁流の海となり、ごうごうたる音とともに怒涛が波頭を立て逆巻き折り重なり、土砂、流木をほんろうしながら溢れ出し、下流へ向かって殺到した。そのためこの氾らんで、常呂川流域に死者二十三人を出し、野付牛村だけの物的被害で、家屋流失六戸、壊れた家二十二戸、浸水二百二十六戸を出し、開墾地の九割二百十四戸が冠水した。また道路は破壊され、橋も流され、市街地との連絡のと絶えた北光社方面は救助も思うに任せない状態となった。

八日午後二時から水が引いたあと、人びとは秋の日差しの下、岩石や土砂、大小の倒木の横たわる河原と化した荒涼たる開墾地をぼう然と眺めるばかりであった。全くの無一物、食事にも事欠いた入植者の中には、楠弥が北海道庁から取付ける救済の道路工事を待ちきれず網走の漁場や牧場へ、また、つてを頼って道央方面へ出稼ぎに行っ

たまま行方も知れなくなった者もいた。

入植者たちは集まって会議を開き、到底こんな所におられない、もう少しましな所に移りたいということになり、それを実行してもらえないということで、洪水後一挙に数十戸程の家がこの地を去った。また女たちのなかにも集まって愚痴と嗚咽を交わし合うという暗い雰囲気が生まれた。そんな中を楠弥ら指導者たちは急きよ各戸を廻って懸命に慰留して歩いたのであった。

結局、三十一年には、入植戸数百六十七戸中三十五戸、三十二年には、五十四戸が入植したものの三十八戸が逃亡、三十一年より三十六年に至るまで、入植者二百二十一戸中百五十九戸の逃亡者を出すに至った。第二の故郷建設のために踏みとどまったのは、明治三十六年の時点で六十二戸であった。

また入植民は、北光社の移住民規則によって、成墾地の十分の四（明治三十一年改正規則）を分与されることを約束されていたが、開墾が思うように進捗せずこの約束は守られることがなかった。すでに入植者たちは、借用した食糧、種子代金八十円を返済することができなかったばかりでなく、小作料も滞納し、中には二百有余円の負債を残したまま逃亡した者もあり、得べかりし土地分与の債権も負債と相殺されたのであった。

洪水後、楠弥は、初代北光社社長坂本直寛の奔走で、時の北海道庁長官がかった有力な民権運動家であった杉田定一であり、それに内務大臣がわが国最初の政党内閣をつくったいわゆる隈板内閣の板垣退助であった関係で、北光社にも水害救助費を受けたが、災害は全道の河川に及んだので、それは応急措置の域を出るものではなかった。

そしてこの状況下、北光社が最初に貸下げを受けた土地一千八百九十町歩は、三十二年二月までに一千二百八十七町三反七畝二十歩に減少したが、このことは楠弥の心境の変化か、出資した高知県の株主のこれ以上の出資への

ためらいか、実査の結果不良地を除去したためか明らかでない。

こうして減地したにもかかわらず開墾は予定通りには進まず、北光社は明治三十七年三月までに六百四町八反二畝二十五歩という貸下地の二分の一ほどの成墾を見、北海道庁から付与を受けるにとどまった。

このような苦しい経営の中でも楠弥らは、洪水に対する道庁からの救済に応じて、屯田兵村三区から上常呂二十九号線を経て常呂川を渡り、その南岸を西十三号線に至る道路工事を請負った。これは入植者たちに現金収入の機会をもたらすとともに道路を利用する便役をもたらしたのであった。

明治三十年、野付牛村戸長役場が開設されると、楠弥は北光社を代表して、屯兵村代表の井関保太郎とともに村総代人に選出された。この総代人の職務は、明治九年に定められた各区町村金穀公借共有物取扱土木起功規則という法規によって、村戸長が、村有財産や米倉の米の処分をしたり土木工事を行う場合に、総代人が連印署名しない限り、これらの事業を執行することができないという大きな権限をもつものであった。

この総代人の制は、わが国の明治地方自治制が設定されて、町村に議会が設置されるまで存在したが、北海道では長く自治制が適用されず、町村議会が設置されなかった地域があり、総代人の選挙は、北海道開拓使が定めた布達によって行われたが、村内に相当の財産を持つ者の中から選ばれることになっていたから、楠弥の所有する財産と経歴からみてこの職は、かれにふさわしいものであったといえよう。

この明治三十年代、北海道では道東への鉄道敷設が話題となっていた。この動きのなかで楠弥は、北光社の経営に力を尽すとともに、野付牛村戸長の田中愿等と協力して北見鉄道促成の運動を開始した。そして明治三十三年、北海道官設鉄道第二期幹線速成同盟会を結成、この会の決議によって、楠弥は請願委員総代の一人として上京、帝

国議会や政府への請願を重ねた。また楠弥は、同郷の高知県出身の道庁の国沢鉄道部長にあって、当時、旭川から釧路に達する幹線が第一期線であり、十勝の利別から北見の相内に至る線が第二期線であったのを第一期線に昇格させ、鉄道が速設されることを要請した。三十三年九月、これに応えて国沢部長が同線の視察に来ることを野付牛村役場まで電報で連絡してきた。

そこで楠弥は前田駒次を帯同して、利別太(現池田)へ向かうことにしたが、十勝、北見の地理事情にくわしく、オロムシ(居武士)、現訓子府町日出に住むアイヌのエレコークに道案内を頼み野付牛を出発した。この旅行を西田喜一の「野付牛崎人伝」は次のように伝えている。

楠弥と前田は騎馬で、未踏の山奥を谷を渡り丘陵を越えて進むうちに、前田の磁石の指針によれば、南進すべきなのに北進しているのに気付कि、エレコークに注意したところ、これに答えずそのまま前進するので、たまりかねた前田は磁石の指針による方向通り進むよう厳しく指示した。こうして前進するうちに一行は密林の中に迷い込んでしまった。ここにいたってエレコークは前田の指示を黙殺して彼の選んだ方向へ進みはじめた。やがて小さな流れに出合くと、エレコークは川砂をすくいにとって口に含むと、これが利別川だと叫び、その流れに沿ってぐんぐん前進したところ、遂に陸別に着くことができた。

それからは利別川の本流に沿って進み、出立してから四日で遂に利別太に到着し国沢部長とあうことができたのであった。

この楠弥、前田の積極的鉄道敷設運動が実り、国沢部長の帰庁後、十勝北見間に一期線昇格に結びつく路線の実測が行われた。

さらに、明治三十五年、園田安賢北海道庁長官が北見地方の行政視察に来たとき、楠弥は運輸交通に関する陳情書を提出、北見地方への鉄道敷設を繰返し説得した。その後、日露戦争が勃発したため国内鉄道敷設は延期されたが、三十九年、利別太―相内間の鉄道工事が二期線から一期線に昇格、四十年利別太から工事が始まり、四十四年、遂に野付牛まで鉄道が敷設されたのであった。

九月二十五日、野付牛駅が正式に開駅した日、村民は駅頭に集まり、熱狂、歓喜して列車を迎えたが、この初列車で来北し、北見に定住し、企業を起こし成功した人びとも少なくなかった。しかし、このとき、楠弥はすでに世を去っていた。

楠弥らの尽力で開通した鉄道によって、当時四億石と推測されたオホーツク内陸の原生林が本州の企業家に注目されることになった。

手始めにこの年、三井物産が野付牛方面の冬山二十五万石の木材出材の計画を樹立、さらに翌大正元年、国有林二百六十七万石余の年期特約を結んだ。こうしてオホーツク内陸の原生林の立木が伐採、加工され、この網走線（後に池田線となり、さらに銀河鉄道ふるさと線となる）の野付牛駅をはじめ沿線の各駅から貨車に積載され、夜も昼も運ばれ、釧路港から移輸出されるようになった。また農業生産物も鉄道が敷設された結果、遠隔地への輸送が可能となり、ハッカ、青えんどう、菜豆類がさかんに栽培され積み出されるようになった。

とくに、大正三年、第一次大戦が始まると、ドイツ潜水艦の船舶無差別攻撃によって、食糧不足に悩むイギリスなどへ、青えんどう、菜豆（小手亡）、馬鈴薯でん粉などが大量に輸出され、価格が暴騰し、豆成金を生ずるに至った。さらに平和の回復後、ハッカの価格が暴騰しハッカ成金をも生み出した。

この北見地方の繁栄を聞いた人びとは、本州府県からこの鉄道を利用して入植、北見と地方の人口は急激に増大し、賑やかな市街地が形成された。ちなみに、屯田兵北光社移民が入植を終えた年の翌年、明治三十二年、野付牛村の人口は四千三百六十人であったが、十年経った四十一年になっても五千七百七十五人で、その伸び率は一・三パーセント強に過ぎなかった。ところが四十一年から人口が爆発的に膨張、これより十年後の大正六年には、同一行政区域で三万四千二十七人と六倍に近い数字に達したのであった。

楠弥は、この繁栄を見ぬうちに没したが、楠弥の長男孟虎は、楠弥の没後三十六年を経た昭和十五年、野付牛町（現北見市）を車中より見て通過、父上の業績について次のように触れ、

「今や此地が鉄路四通し、旭川以北の大都市となり、最近北見市となれるを見るにつけても、この鉄道の速成に心血をそそいだ父上を九宗の下に鳩（？）起し、今日の盛事を見せたらば如何に喜ぶことだろうと追憶の念転た切なるものがある。」

このほか楠弥は、北光社の附属事業として農場の直営の農業を営もうとして毎年二十町歩耕作の方法をとり、また入植民の日用品の需要に應えるため商業部を設けた。また常呂川で運送業を営もうとして浚渫を行い舳を用意し、さらに小蒸汽で貨物輸送を企てたりした。しかし二、三回の試運転を行うにとどまった。

楠弥はまた、同土竹内羊之助の発案で、農場内のおびたしいタモ樹を製材して流送しようとし、三十年の浚渫後に実行したが、材木が河口まで到着せず、これも失敗に終わった。

明治三十三年九月、野付牛村農会が創立されると楠弥は初代会長に選任され、前田駒次が書記に推された。この団体は、わが国の各地にあった農談会、農事会など農民の知恵と経験をもとに結成された伝来の組織と政府の農政

活動の下部組織を統合、明治三十二年、農会法をもつて成立した全国農会の下部組織をなすものであり、後年、産業組合、農業協同組合へと発展を遂げていったもので、楠弥はひろく野付牛村一帯の農業の発展にも貢献した。

ところが明治三十六年、すでに述べたように、地積六百四町八反三畝二十五歩を開墾し、北光社の農地として付与され、この土地が百四十九区画をもつて小作農を定着させ、事業の発展がこれから期待される中、持病の結核が悪化した楠弥は、北見に心を残しつつ、後事を前田駒次に託し、高知県の介良村に帰郷した。この帰郷には、郷里の出資者が楠弥の事業の継続に見切りをつけ、出資に消極的になってしまった気配もみられる。その後の楠弥は病気が重態となり、明治三十七年十月一日、五十歳を一期に永眠した。長男の孟虎は、「晩年の父上」と題し、その不遇な生涯を次のように悼んでいる。

「父上は多年政治運動に身を委ねての公共事業に力を致したると、一つは北光社に多大の資力を注入したのと、且つは余が放縦生活を恣にしたる為め、次第に家産を蕩尽し、しかも政治上に志を得ず、又た北光社の事業も予期の成功を挙ぐる能わず、一生を生意不遇の間に送られたることは痛恨惜く能わざる所である。」

また楠弥の永眠を土陽新聞では「澤本楠弥氏の訃」と題して次のような追悼の記事を記載した。

「往年自由主義の為に尽瘁し就中三大事件建白当時の如きは我が州の志士と石川島の鉄窓に呻吟し政友の敬重する所なりしが疇昔志を立て北海拓殖の事に従い拮据經營漸く其効果を見んとするの時に方り郷国一派の為に其前途を誤まれ遂に該事業の成功を見るに及ばず空しく故山に帰臥し悠々風月を楽しむ居りしに不幸二豎の侵す所となり耆扁の藥石も其効を奏せずして昨日午前不帰の客となる悼むべき也。」<sup>(9)</sup>

楠弥が永眠したことを知った野付牛村では、戸長の岩渕周之助、楠弥の事業の事実上の後継者となる前田駒次、

実業家の北川知衛、嶺次吉郎、鈴木浩氣は連署して、十月十一日の日付で、楠弥の次男で北光社の事業を継いだ弘道あて丁重な追悼文を送った。

肅啓

御尊父様儀御養生不相叶終に御逝去と成る由、嘸々御愁傷の御事と奉察候。

殊に御家兄様には自今載筆御従軍と承れば御遺憾一段の御事と奉存候

回顧すれば不肖等始めて御尊父様の御声咳に接するの栄を得候は実に明治二十九年のことにして、当兵村開始に先つ一年、北光社農場御創業のため御来北被成候時にして、当時地方は満目の荒蕪只た熊鹿の荒するままに任せありしを深く恨事とせられ、爾来健康の御勝れ被成ざるも意とせられず、日々土人と共に糧を包んで具さに地方の山川を渡渉せられ、其処に開拓の要旨として大に交通機関の設備を修むべしと、即ち常呂川浚渫及美幌街道を詳細法案を具して、或は支庁に或は道庁に往来再三、事の緒に就くや、不肖等顧みて此工事他日地方を益するあらば吾曹の榮なりと、かくて二工事終を告ぐる頃本道鉄道開発の案発表せられ候、然るに案は多く当局の机上になりたるため緩急首肯にあたらざるものあり、当地方を経過すべき路線の如きは即ち其の一にして地方開拓に關するのみならず、直ちに地方の生命に繋るものあり、かくと見らるるや御尊父様には又々地方の為、奮然満腹の熱誠を捧げて御立被下、御病軀或は実地計算問題を研究すべく、丈に余る熊笹の中を渉獵せられ、或は鉄道部長の巡回を機として其の計画の非を説破せんがため四十里の程、利別太まで路なき山野を御越し被成候等、尋常一様の苦心にあらず、かくて御保養のため郷里に出立なさる都度だに尚必ず地方問題を携えて或は道庁に迂回し或は在京要路に開陳の勞を御取り下されし等、地方の負う所決して少なきに非ず、然も山間の見るかげもなき貧

村の事として此の御尽力に対し酬ゆるありしにあらず、然り若し御酬申上し事ありとすれば恐らくは御健康を其上にも害せられたるそれなるべく、貴重なる残年の幾分を御縮め被成しならんと被存候、然るに地方開拓の実意の如く参らず。ために常呂川も美幌の道路も未だ利用せらるるの機に至らず、鉄道速成の事亦未だ十分なる解決を与えられず、只隠れたる御尽力として没了せられつつ有之候事、実に不肖等の乏しきに座する次第、在天の御靈位に対し面目も無之儀と奉存候、乍去今後は不肖等も乍不及其心とせられたる所を心として碎骨地方のため尽す心組、此年鉄笛利別の溪谷に響きて黒煙常呂の野に棚引くべく満載の馬車絡駅として美幌の路狭きを訴うる日あるべく、舟師の歌水声に和して舟筏常呂川を上下する時あるべしと奉存候、否清酌粗菓の典在天の御靈位に白するの日あらんことを期する次第の御座候。

御尊父様御逝去の報を聞きて追慕の念措く能わず、蕪雜の辞地方及不肖等が御尊父様に負う所並に（？）不肖等が感懷を叙して御弔詞に代ふる事如斯御座候

頓首々々

明治三十七年十月十一日

岩渕周之助

前田 駒次

北川 知衛

嶺次 吉郎

鈴木 浩気

## 澤本弘道様

楠弥の永眠に追悼文を送った人びとは、後に野付牛同志会を組織し、互いに協力して北見地方に企業を起こし地域の発展に寄与したが、市民の自由な経済活動を振起し、その富をもって地域の繁栄を図ることを目的とした高知の立志社自由党の澤本楠弥の遺志を継承するものであった。

楠弥の長男孟虎は、また父を「地方有志家の典型」として次のように敬慕、推称した。

「父上は政治家として又た事業家として終に天下に名を成すに至らなかったけれど、地方政治家の典型としては推称に値するものがあつた。其の性を享くるは真摯着実にして身を持つること質素勤儉、しかも前に言える如く其の頭脳緻密にして頗る数理的思想に富み、且つ人に接する誠実親切にして実に地方の模範紳士としては間然する所のない人であつた。而して斯くの如く父上は思慮周密な質であつた上に、病軀万一の事を慮り、生前他と関係せる事件は死後何人にも明瞭ならしむべく一々記録に存してあつたが、是は吾々子孫の学ぶべき所である。」

近代日本の政論家徳富蘇峰は、イギリスの近代社会を創り出した担い手となつたジェントルマンに比べて、わが国の「田舎紳士」<sup>10)</sup>を明治の代の未来をつくり出す人として、彼らに期待をよせ、大いに称揚した。

田舎紳士とは、蘇峰によれば「相当の土地をもち、生活に余裕があり、旧武士ほど尊大ではないが、水呑百姓ほど卑屈ではなく、村落で高い地位をもち、村民から敬愛され、勸業、土木、衛生、学校等の公共に尽力する人」<sup>10)</sup>のことである。孟虎と蘇峰のことばを合わせると、楠弥は、近代日本が誇るべき真正の紳士であつた。

また、江戸時代、地域の指導者として、わが一身の利害をこえて地域民に尽くした人のことを義民といったが、

楠弥こそは、この義民の伝統につながる人とみることができよう。

註

- (1) 永井秀夫「日本の歴史二五巻、自由民権」（小学館・一九七六年）
- (2) 本稿の執筆にあたり、澤本楠弥の生涯について、澤本孟虎「小さな足跡」澤本孟虎自伝の孟虎の孫、澤本正樹版（一九九三年十一月）に多くを負った。
- (3) 植木枝盛全集第十巻（岩波書店・一九九一年）
- (4) 池田七郎「北光社移民史」「北見市史資料編」（昭和五十九年）
- (5) 清水昭典「坂本直寛の政治思想と北海道開拓論」（札幌法学第五巻二号・平成六年三月）
- (6) 坂本直寛「北海道の発達」（明治二十九年八月十一日・講演・北海道大学附属図書館蔵）
- (7) 土陽新聞（明治三十年一月五日付）
- (8) 伊東弘祐「北光社農場開拓記録」「北見市史資料編」（昭和五十九年）
- (9) 土陽新聞（明治三十七年十月二日付）
- (10) 坂野潤治「体系日本の歴史13近代日本の出発」（小学館・一九八九年）

付記

本研究は平成八年度札幌大学研究助成を受けて行ったものである。